

日本現代史とジャーナリズムについて

小 宮 京

本特集について

この特集は、日本現代史とジャーナリズムに注目する。

日本現代史に取り組んでいると、優れたジャーナリズムを意識する機会が多い。二〇二二年二月に刊行した、奥健太郎・黒澤良編『官邸主導と自民党政治 ―小泉政権の史的検証―』（吉田書店）という論文集を例に挙げてみよう。研究会を立ち上げる前から、多くの執筆者が、清水真人『官邸主導 小泉純一郎の革命』（日本経済新聞社、二〇〇五年）を強く意識していた。そのため、研究会には清水氏にも参加してもらった（以下、敬称略）。清水のコメントは論文集の充実に大きく寄与したのは間違いない。この間、ジャーナリズムとの共同作業のようなことを行ったともいえよう。同時に、こうした「共同作業」は（歴史）研究とジャーナリズムとの違いを意識する機会でもあった。

振り返れば、小宮が日本現代史に取り組む際に、多くのジャーナリストから様々な証言と示唆を得た。最初の著作『自由民主党の誕生』、二冊目の単著『語られざる占領下日本』ともにそうである。^①個人的には、

ジャーナリズムを意識しつつ、研究を行っていると言えようか。

このように、体験的に研究、とりわけ日本現代史はジャーナリズムと切り離せないように考えたことから、本特集を企画した。以上の企画の背景を伝え、ジャーナリズムの現場におられる方々にインタビューをお願いした。収録した論考は全て、学部生や大学院生向けの演習で語ってもらった内容をベースとして、加筆修正して頂いたものである。

まずは、清水真人に「ジャーナリズムとは歴史の第一稿を書くことである」を語ってもらった。

次に、宮川徹志に「日中『密使外交』の全貌―佐藤栄作の極秘交渉―」について、を語ってもらった。打診した際にもお伝えした事として、日本現代史が対象とすべきものとして映像メディアがあるものの、うまく使えていない現状がある。^②そうした意識から映像メディアに携わる方にお話を伺うことを考え、宮川に依頼したところ、快諾を得た。

三番目は、前田啓介「日本近現代史をどう報じるか」である。主に昭和史の様々な取材を行っている前田に、その経験を語ってもらった。

最後に、もっとも現代に近いところ、二〇二二年一〇月に退陣した、菅義偉内閣で、官房長官番を務めていた菊地直己に「菅義偉政権期の官邸を中心に」を語ってもらった。取材で忙しい中、岡本智にも参加してもらった。

本特集のみで、日本現代史とジャーナリズムに関する結論が出せるわけではない。とはいえ、普段あまり意識しない「研究」とは何かを、あらためて考える機会となれば幸いである。

〔謝辞〕本特集は青山学院大学総合研究所プロジェクトの成果の一部である。

インタビューにご協力いただいた清水真人、宮川徹志、前田啓介、菊地直己、岡本智、各氏（掲載順）、インタビューの整理を手伝ってくれた市川周佑氏（大学院博士後期課程二年）、小島彩香氏（大学院博士前期課程二年）、特集に協力してくれた日本現代史研究会に感謝したい。

注

（１）小宮京『自由民主党の誕生 総裁公選と組織政党論』（木鐸社、二〇一〇年二月）、小宮京『語られざる占領下日本 公職追放から「保守本流」へ』（NHKブックス、二〇二二年一〇月）。

（２）映像メディアに限らず、YoutubeやTwitterといったネットも十分に活用されているとは言い難い。小宮による試行として、小宮京『Inicola』小史チャイドルからニコ⑤へ』『史友』五二号（二〇二〇年三月）や、小宮京『経済財政諮問会議と事前審査制』奥健太郎・黒澤良編『官邸主導と自民党政治

い。
——小泉政権の史的検証——（吉田書店、二〇二二年二月）所収を参照された